

Oracle Night の主題としての記憶

Memory as a Theme of *Oracle Night*

荏開津邦子

Kuniko EGAITSU

Paul Auster は fiction または non-fiction の形で、自らを含めてアメリカの現代人の抱えるテーマ——孤独、アイデンティティの不確かさ、物質主義で構築された大都会の生活、家族というもの、また世界や場所そのものの持つ属性、などについて彼独特の手法で書いてきた。Aliko Varvoli は *The World That Is The Book* の中で作家としての Paul Auster の位置について、Sven Birkerts が彼のことを “the ghost at the banquet of contemporary American letters” と述べたことを引用し、次のように説明する。

His fiction is hard to classify, as it borrows from different traditions and participates in, without belonging to, various ‘schools’ of writing.¹⁾

小説の構成においては、Paul Auster は、伝統的なりアリズムの手法と同時に、それを超えた実験的な試み、例えば、文学作品の allusion —ヨーロッパの作家たちや、自国の Poe, Hawthorne, Melville, Emerson そして Thoreau といった同時代よりむしろ19世紀の作家たちなどの作品—また autobiographical な要素の斬新な利用²⁾、からくりと謎解きを含む緻密な構成などを用いて、いわば metafictional な世界を創造していく。彼の作品の人物たちは皆何らかの喪失者であるか、あるいは閉ざされた世界を抱えている。その空白を埋めるために、あるいは閉塞した場所から脱出するために、又自分を取り巻く謎を解く為にもがく seeker であり、detective であるといえる。

最も新しい小説である *Oracle Night* は彼の11作目の小説であり、これまでの作品の特徴の多くを含みながら、中心人物 Sidney Orr とその妻 Grace、友人の John Trause をめぐる愛と信頼、そして裏切りと暴力のドラマを展開させる。緻密な構成と複雑な語り口、歴史的事実と虚構の混交、その境界線の

消失といった要素によって単純であるはずの物語が何重にも込み入って、単に普遍的な価値観—愛と信頼の物語という次元を超えたものになっている。その *metafictive* な手法と共に注目しなければならないのは、世界の性質について又其処に重要な役割を果たす要素としての言葉の力—魔力と同時に無力—が、時間を軸として提示されているということだ。以下はその視点からの分析である。

I

Oracle Night は一人称で語られる回想記である。実際に出版された2003年の時点において中心人物である作家の Sidney Orr が二十年前の出来事を語るという設定になっている。彼は地下鉄の階段から落ちて瀕死の状態から長い入院生活の後、奇跡的に退院する。彼の唯一の選択肢は待ちうけている未来があるかのように装って生きることしかない。彼は、過去も持たず現在もない自分を “a man who had lost his way in a foreign city”³⁾ と形容する。損傷した機械のように機能不全に陥った部品が動き始めるのは、彼が何度も *the morning in question* と言及する1982年9月18日のことである。偶然出会った *blue notebook* にたいして、二年ぶりに書くという行為を始めるのだ。

この作品は多くの物語が挿入され、*reality* に影響を与えたり、*reality* に取って代わったり、また *reality* を創造したりさえする。作者は *The Invention of Solitude* の中の “The Book of Memory” と名付けられた章のなかで、事実とフィクションの関係について考察している。⁴⁾ ストーリーはさまざまな意味を含んで成立している。一方事実はそれ以上の何の意味も持たない。フィクションの場合、読む間、また読み終わってから色々な解釈が始まる。心理的、歴史的、社会学的、構造的、哲学的、宗教的、性的等、単独にまたそれらを組み合わせることで様々に解釈される。例えば、彼が結婚式から家に帰って、鍵を差し込んだら鍵穴の中で壊れた。そのとき、彼女と知り合って間もないころ彼女の弾くピアノの鍵盤のひとつが壊れたことを思い出す。この事実を小説に使えば象徴的な意味をもつだろう。しかし実際には単なる事実に過ぎない。以上のような趣旨である。

Auster は *reality* を *fiction* の如く、又その逆に *fiction* は *reality* の如く、同じシステムによって解釈することが可能であると主張しているのだ。

この作品においても彼のその主張が明らかである。*Oracle Night* の読者は最初の段階では、当然 Auster の書いた *fiction* を読んでるのであるが、語り手の語る回想の中で、徐々にそれを *reality* と認識していく。これは一人称

で語られる全ての作品において自然な読書行為であるが、Auster の場合はそれを一層容易にさせる手法を用いる。第一に、作家である語り手について、autobiographical な要素— Brooklyn の住居、マンハッタンの地理的な詳細な描写—などが散りばめられていることである。次に、実際に起こった周知の歴史的事実を適切に挿入する。第三に出来事の正確さと詳細へのこだわりがある。それは内面的な説明や、その出来事の原因といったレベルではなく、外面的な事実、つまり、時代、日時、天候などの詳細な記述であり、人物については、その経歴、背景の chronological な説明である。そしてこのような手法を最も効果的にしているもの、結果的に全てを reality の環境に組み入れてしまおうとするものが、長いものは何ページにも亘って付けられた詳細な脚注である。

既に述べたように彼の作品の多くは単に中心人物の物語ではなく、それと同時に色々な形でそこに挿入される多くの物語が複雑に関係しあって重層的に作品を構成していく。Oracle Night においては中心人物の作家 Orr が創作する小説が作品の中でパラレルに進行して、互いに影響しあって結末へと終結する。この作品のタイトル Oracle Night 自体、Orr が創作する小説の中に出てくる作家が残した原稿のタイトルであるということになっているのだが、前述の彼の手法は、この作品の全ての次元に亘るものだ。例えば、Orr は一人称で語りながら、妻との出会い、妻の家族の身内同然である作家の John Trause のことなどについて、脚注を用いて chronological で biographical な外見を持たせながら展開させていくのだが、これはまた、Orr が書く小説においても、同様だ。例えば“Oracle Night”の原稿を残した作家 Sylvia Maxwell について、その周到さを窺うことができる。彼女が活躍した年代、いくつかの具体的な作品名、問題の原稿が書かれた時期、彼女の経歴上の興味深く、意味ありげな出来事、原稿の行方と現在の状況、などについて具体的な数字や場所、人名などを詳しく記述するのみではない。John と Orr の会話の中で、また図書館で検索したと言う設定で、架空の作家 Sylvia Maxwell に繋がる‘実在の作家’としての Sylvia Monroe について、biographical な事柄のみならず、作品のあらすじにまで言及することで徹底した reality に読者を巻き込もうとする。

また、多くの歴史的事実の取り扱いについても同様である。例えば、“Oracle Night”のなかで、過去と訣別して生きようと決める Nick が泊まることになるホテルは、カンザスで実際に事故のあったハイヤットホテルである。こうして惨劇の過去を持つホテルも、彼と同じく過去を忘れて未来に向かわなけ

ればならない。

又例えば、Ed が地下シェルターを作るのはキューバのミサイル危機が起きた62年の秋であり、そのシェルターが彼の歴史保存事務局になるのである。こうして周知の歴史的事実を単なる象徴的な利用というのに留まらず物語に直接関わらせてしまう。

同時に Auster は、彼自身の創作過程を明かしているようなかのように Orr の創作過程を提示することで一層 reality と fiction の境界線を曖昧にしてしまう。例えば、Orr は Nick の職業を編集者に設定し、運命の女性 Rosa を Grace の職業や彼女との出会いなどをモデルにして描き出す。John は、実名のみで登場させ、Nick が仕事で関わった作家であり、Ed が戦地で若い兵士だった彼に出会うという設定にするのだ。彼のアパートは、作中の部屋になり、現実とその部屋に入ったとき、‘strange feeling I was entering an imaginary space’ という感覚を経験する主人公。こうして fiction が限りなく真実の色に染められた ‘reality’ へと展開されていく。

それは青のノートの物語においても同様だ。Nick は彼のところに届いた“Oracle Night”を読むうちにそのストーリーと自分自身とを関わらせ始めるのだが、Nick の状況は始まったその時点からそのまま Orr のそれでもある。Nick は過去を捨てて新しい人生を生きようとする男だし、Orr は思い掛けない事故で九死に一生を得た。過去は失われ宙ぶらりんの状態にある。言い換えれば Nick は偶然手中にした過去の作家の原稿を読むことで、Orr は偶然入手した青のノートに書くことで未来に向かおうとする。

Nick と Rosa の関係も Orr と Grace の関係の平行であるといえる。病後、仕事もできない上に900ドルもの医療費未払いの状況にある Orr が Grace の謎の沈黙に直面した後、ノートに綴られる Nick は Rosa と接触を何度も試みるが失敗に終わり、留守番電話に向かって語りつづけるしかないのだし、credit card がキャンセルされたため金が無くなりホテルにも戻れない。

このような状況の中で青のノートの物語は一気に進展を見せる。Nick の妻の行動、Rosa の動き、Ed の発作と入院、すれ違い、穴の空いたポケットから落ちた鍵、あつという間に Nick は頑丈な壁で遮られた地下シェルターに閉じ込められ、文字通り地表から消えてしまうのだ。ワルシャワの電話帳と“Oracle Night”の原稿とともに。

ここにいたって徐々に fiction が reality に先行し始める。青のノートの中で Nick が閉じ込められると同時にそれを書いている Orr の頭からそれまでは口述筆記をしているかのように自動的に出てきた言葉が消える。

Maybe there was a way out, but for the time being I couldn't see one. The only thing I could see that morning was my hapless little man-sitting in the darkness of his underground room, waiting for someone to rescue. (109)

Nick が mysterious な偶然で出口を失ったと同時に現実の Orr にも同様な mysterious な事件が展開する。Paper Palace の突然の閉店、Trause の原稿の紛失、泥棒の侵入、妻の失踪等。そしてついに fiction と reality が同時性を持ち始める。Ed の '人類の終末' の経験として Orr が用いた死んだ赤ん坊を抱いた若い母親の話は歴史的エピソードだが、それを書いた翌日彼は喫茶店で偶然同じようなこの世の終末を思わせる出来事を新聞で読むのである。その記事はそのまま作品に引用されて信憑性を印象付ける結果となっている。両者とも赤ん坊と母親に関するもので、Grace の妊娠の問題の予兆であるといえるわけで、ここでは fiction と reality の偶然性と、更に予言性も暗示する効果をもたらしている。

fiction が reality の領域に侵入する例として very clear-more real than real という Grace の夢がある。地下室、梯子を降りて辿りつく秘密の部屋、其処にずらりと並ぶ本棚、何百冊の本、locked out される結末等、この夢は一種の 'sanctuary, a small erotic paradise' であるのに反して、fiction の場合は、'a bleak cell, inhabited by one man, whose only ambition is to escape' (140) の違いはあるがここには、fiction と reality の interactive な性質が提示されている。この夢をきっかけに一気に現実が、fictive な様相を帯びて展開するのである。

以上で見てきたように、Auster は、fiction を極限まで reality の外見へと近づけようと試みる。その根底にあるのは何か。それは彼の少年時代の経験に基づく世界の性質への信念である。1961年14歳の時サマーキャンプで落雷を受け、隣にいたキャンパーの一人が死んで、自分は助かったという経験である。彼はそれを自分にとって最も意味を持つ体験として何度も語っている。自分が生きている世界というものがどんなに fragile and fluky であるかを悟ったというものだ。Auster は Michael Wood のインタビューで自伝的な作品である The Red Note Book について次のように述べている。

I look at those stories as a kind of ars poetica-but without theory, without any philosophical baggage, so many unexpected and improbable events, I'm no longer certain that I know what reality is anymore. All I can do is talk about the mechanics of reality to gather evidence about what goes on in the world and try to record it as faithfully as I can. Present things as they really happen, not as they are supposed to happen or as we'd like them to happen.⁵⁾

また、前述の *The Invention of Solitude* はじめ、他の autobiographical な作品には、the nature of chance の物語、つまり嘘のような偶然の例が溢れているし、2001年には *True Tales of American Life* を出版して話題を呼んだ。⁶⁾

このように事実と真実の物語に大きな関心を示す Auster は、*Oracle Night* においてはその理論を Dashiell Hammett の *The Maltese Falcon* の7章の the Flitcraft episode に代弁させる。Nick の物語は、それを展開させたものだ。町を歩いていて突然建物の10階から梁が落下して九死に一生を得た Flitcraft は、‘the world isn’t the sane and orderly place he thought it was’ を痛感する。Orr は世界の無秩序の偶然性について Dashiell Hammett の言葉を引用する。The world is governed by chance, Randomness stalks us every day of our lives and those lives can be taken from us at any moment-for no reason at all. (14)

結局、世界の本質—冷酷な偶然性を体験させられたとき、‘the principle of the falling gargoyle’ に従って生きるかどうかは別として、もはや ‘the bare-bones truth of unpredictability of experience’ 以外に reality は存在しない。その意味では fiction と reality の間に何の相違もなく、二つは全く等次元に存在するというのを、この作品で Auster は主張しているのである。Chang が自分の身の上話として語った話を信じ込んでいたら、二十年後、たまたま開いた文化革命の本に同じ話が載っていたと Orr が回想する。人間の、そして世界の真実というものは fiction と reality の差のみならず、彼我の差を越えてしまうといってもいいのである。

II

Auster はこの物語の展開に mysterious に関わるものとしてポルトガル製の a blue notebook を用いる。散歩に出かけた Brooklyn の通りにあった文房具店 Paper Palace で見つけたノート、それを見た時彼は、肉体的な快感に近い喜びを感じるのだし、突然の理解できない幸福感に襲われるのだ。そして店主の Chang がまるで愛撫するかのように表紙に触れながら “Lovely book, but no more Portugal. Very sad story.” (6) と言う時、それはこのノートの役割を暗示しているといえる。このノートそのものが既に物語なのである。

青いノートが神秘的な魅力で Orr を惹きつけることから物語が始まり、その謎を深めると同時にそれを解決させる役目も果たすのである。第一に店主の名刺に記された M. R. Chang の MR について ‘more american’ だとする彼に対して、Orr が心の中で読み解く三つの phrase がこの作品を説く鍵にもなり、ノートが象徴するものを示し、またその果たす役割を示していると見な

すことが出来るのではないか。何故なら、このノートが、Orr に創作させる精神力— Mental Resources を集中させるのであるし、またそこに書かれた物語は複数の読み取り— Multiple Reading を提供しているし、そしてノートに向かって書き綴るとき訪れる Mysterious Revelation が真実を明示することになるからだ。

青のノートは彼に、病気後初めて幸福感の中で机に座り何かを書こうと思わせるのみならず、それに伴って不思議な力を発揮する。書いている時 Grace が帰宅してノックしたけど気がつかない、また部屋を開けた彼女には彼の姿が見えない。また、別のとき、何度も電話が鳴ったはずなのに彼には聞こえない。青のノートは彼を別の物語の中に運び去ってしまっているのだ。実際、Orr はノートを閉じた後でさえ、ノートの虚構と現実の重なり合った double consciousness の中で現実の自分の不在を経験する。ここにいる自分と、ノートに展開されているこの部屋のことを書いている自分、また、頭の中に存在する幻覚の部屋と実際の自分がいるこの現実の部屋と。その中で自分がいるのにいない不在の状態を経験するのである。The words came quickly, smoothly, without seeming to demand such effort. (14) You were distracted, lost in what you were doing... but ever since I bought that notebook, everything's gone out of whack. I can't tell if I am the one who's using the notebook or if the notebook's been using me. (165-6) こうしてノートの先導で Nick Bowen の物語が創造されていく。

現実の中で追い詰められた Orr がいったん行き詰まってしまって放棄したノートが最後の役割を果たすために再度開かれることになるのは、彼が Chang とのトラブルを含め、これまでの失敗についてノートが原因であることを悟った時だ。

... it was that the notebook was a place of trouble for me, and whatever I tried to write in it would end in failure. Every story would stop in the middle; every project would carry me along just so far, and then I'd look up and discover that I was lost. (210)

初めて、ノートの魔力から自由な感覚で書き始めるのだ。彼自身の instinct and suspicions だけを働かせて現実の物語を書く。それは Trause に始まり Trause に終わる物語である。妻の不意の涙、謎の言葉、水曜日の失踪、赤ん坊を産む決意などについて彼はノートに謎を解いていく。過去を読むことが現在の空白を埋めることであるように、ここでは書くことそのものが、それを可能にする唯一の手段であるといえるのだ。その作業の中で、彼は、

the darkest, most unsettling possibilities をも動揺なしに受け入れることができる強さを感じている。

Imagine this, I said to myself. Imagine this and then see what comes of it. (212)

ここには、読むことと同時に書くことの意味についての Auster の視点が明らかに示されている。眼前の現実の強いコントロールの下でノートの魔力が書かせた fiction と異なって、現実を手がかりにしながら強い想像力によって構成されていく物語は、detective であり、seeker としての書き手に謎、問題の解決の道筋を示すことに繋がるのである。

彼はこうして Grace と John の過去および現在の関係についての物語を書き、書き終えたときノートを細かく破ってゴミ袋に捨ててしまう。

Flitcraft and Bowen, the rant about the dead baby in the Bronx, my soap opera version of Grace's love life-everything went into the garbage bag. After a short pause, I decided to tear up the blank pages and then shoved them into the bag as well. (219)

ノートに残された空白のページも引き裂いて通りの街角のゴミ箱に捨ててしまう。この行為は言葉によって過去の事実を整理し認識したうえで、未来を知ることを放棄する決意といえる。Orr にとって、妻が彼との結婚生活を選んだという事実が最も重要な意味を持つ。それに従って過去を無意味なものとし、未来を現在の自分のものにするを選択したといえる。

Orr が創作した“Oracle Night”は ‘a brief philosophical novel about predicting the future, a fable about time’ であり、登場人物も ‘pure-fairy tale characters in a pure-fairy tale setting’ (61) に過ぎないがそのテーマははっきりしている。第一次世界大戦時、塹壕爆破で失明した イギリスの兵士が未来を予見する能力を与えられる。しかし恋人が将来彼を裏切る結果となることを前もって知り、結婚の前夜、まだ何の罪とも関係の無い彼女を残して自殺するというものだ。未来を知ることの悲劇とその無意味さの寓話である。Orr はこの信念に基づいた行動を取ることで全ての解決を信じるのである。

しかし、Auster は Orr がノートを破棄することによって、“Oracle Night”の主人公の悲劇は回避され、彼の九日間の苦悩の模索は終了するのだというような安易な happy end を与えない。本当の物語はそこから始まるからだ。

The story was just beginning-the true story started only then, after I destroyed the blue notebook and everything I've written so far is little more than a prelude to the horrors I'm about to relate now. Is there a connection between the before and the after? I don't know. (222)

Johnの突然の死、Jacobの不意の訪問、金の無心と暴力、Graceの流産と命を左右する怪我、Johnの葬儀、死体で発見されるJacobというようにあつという間にこの物語は予期せぬ恐ろしい結末を迎える。

Austerは過去の作品においても多くの文学作品のallusionを用いてきた。ここにおいても、すでに述べたDashiell Hammettを始めとして、Nickの失踪そのものも含め、'We're goddamn gimps of the universe.'というTrauseの言葉は"Wakefield"であるし、Edは"Walden"を引用するし、Poeのechoもある。注目すべきは彼自身の作品のallusionも含まれていることだ。*The Locked Room*のコンセプトがそのまま使われていることは勿論、*Paper Palace*は*Moon Palace*を連想させ、mysteriousな力を発揮するa blue notebookは明らかに*The Red Notebook*に繋がる。そのみならずAusterは*The Red Notebook*の中で語った14歳の時の体験を、形を変えてOrrに体験させるのである。OrrはChangの店にあったノートの中で青のノートを選ぶ。そして青の色は彼に少年時代のBlue Teamを思い出させる。それは14歳の夏、キャンプ中に、選ばれてメンバーになった秘密のエリート集団—Secret Brotherhood, the dream of a perfect societyであり、メンバーの資格はa good sense of humorを持っていること、またa reader of books, lover of justiceでなければならないというものだ。Johnも同じ青のノートを持っているのだし、Graceも好きな色だ。ここではblueはtrue blueにつながるmoral qualitiesを示すものとして主張される。

この道徳的側面を象徴する青と対照的に血の赤がある。Austerはここで赤と青の、色のmetaphorを用いて三人の人物の状況を巧みに提示するのである。'Orr's menstruating schonozz'とJohnに揶揄される突然の鼻血の色である。シャツもズボンも汚して流れ続ける鼻血について、彼は便器の白と対照的な鼻血の色を見ながら、体内から流出する他の液体または分泌物はもっと濁った色であるのにひきかえ血管から進る液だけが赤いのは何故かといった哲学的な考察に耽る。The crimson of a mad artist, red as brilliant as a fresh paint (42) 狂った画家が搾り出す絵の具の真紅、これが人間を生かしていると考える。一方、Graceは赤についてLove and hateを暗示する色だとする。彼女がJohnのことで抱えている秘密はblueの主張する正義と善とは別の次元、本能と情念の赤なのだ。

そして何故、Orrは鼻血を流し続けなければならないのか。医者は心配要らないという謎の発作の意味は何なのか。第一に、Every time my nose gushed blood, I felt like a little boy who'd wet his pants. という言葉に示されて

いるように死の危機を脱して再び新しい生を始めた人間の成長の過程を表すものだ。さらに、少なくとも妊娠していないことがわかるから安心だという Trause の冗談は、書くことという観点から見れば、作家として作品を生み出す準備はできているが結実に繋がらない状態を暗示する。狂った画家の絵の具はいかなる形を描くこともなく無駄に流れ続ける。

流れ続ける Orr の鼻血に対して一方、John の血は外部に流出しない。二個の血塊となって足の内部に内攻している。

The first was in a superficial vein. …The second was lodged in a deep interior vein and that was the one the doctor was worried about. …deep vein thrombosis could be fatal. It could travel through his bloodstream and wind up in a lung, causing a pulmonary embolism and almost certain death. (159)

つまり彼の血は内部に凝固して痛みと危険をはらむ塊となっているのだ。狂った画家の真紅の絵の具は彼の内部で膨れ上がり、死の形を描いている。一つは罪の形であり、もう一つは父親としての苦しみの形といってもいい。過去の秘密と苦しみが彼の体内で真紅の凝固をなしている。いつでも噴出して彼を滅ぼす用意をして待ち構えているのだ。

作者は物語を展開させる重要な要素である pregnancy について、巧みにそれぞれの人物の状況を提示する。Grace は文字通り pregnant として、決断を迫られている状況であるし、John は過去を‘死産’する危機に瀕している。Orr は創作も行き詰まったなかで彼を取り巻く謎と格闘しなければならないといういわば‘難産’の苦悩を抱えている。最終的に Grace は夥しい血と共に全てを流してしまうのだし、John の罪と苦悩の血塊は破裂して死をもたらすのであるし、Orr は、狂った画家の絵の具ではなく、透明な涙を洩れるまで流してそれによって救われるのである。

‘Oracle Night’ の本当の意味が明らかになるのはこの最終局面に至った時点である。Orr は、二年前に Trause と交わした会話の記憶を蘇らせる。それまで周到に暗示されてきた言葉の性質が、Trause と Orr の議論という形で最終的に全貌をあらわすのだ。Trause の知人であるフランスの詩人が、子供が溺死する長い物語詩を書いた。出版後二ヶ月して出かけた家族旅行の行き先で5歳の娘が溺死した。その後、詩人は沈黙を続ける。それについて二人は意見の相違を見る。想像力と現実、詩に書かれた言葉と実際の事件は無関係である。残酷な偶然、又最も恐ろしい形で現れる不運というものは偶然の事実として認めなければならないというのが基本的に当時の Orr の考えであった。これに反して、Trause は次のように言う。

Thoughts are real. Words are real. Everything human is real and sometimes we know things before they happen, even if we aren't aware of it. We live in the present, but the future is inside us at every moment. Maybe that's what writing is all about, Sid. Not recording events from the past, but making things happen in the future. (222)

Orr はこの言葉が正しかったことを知るのである。

At certain moments during those days membrane through which all the invisible forces of the world could pass-nexus of airborne electrical charges transmitted by the thoughts and feelings of others. I suspect that condition was what led to the birth of Lemuel Flagg, the blind hero of Oracle Night, a man so sensitive to the vibrations around him that he knew what was going to happen before the events themselves took place, I didn't know, but every thought that entered my head was pointing me in that direction. Still born babies concentration camp atrocities, presidential assassinations,

disappearing spouses, impossible journeys back and forth through time. The future was already inside me, and I was preparing myself for the disasters that were about to come. (223)

この述懐に示されるように Orr が無意識に青のノートに綴ってきた全てのことは、彼自身の内部に秘密に存在している未来であったことを彼は全てが起こってしまった後に知るのだ。九日間の Orr に大きく影響を与えるのは、Paper Palace の主人の Chang であるが、彼は最初の出会いで 'the metaphysics of paper' に関して語り、文房具店という職業について 'essential role in the myriad affairs of humanity' と述べて Orr に印象を与える。Chang の主張は "Everybody make words." というものだ。生きることに基本的に関わるものが言葉であり、書かれた言葉、語られた言葉は mysterious な力で現実世界へと実現して、人間に大きな影響を与える。どんな言葉も一度書かれ、語られたなら、その時点で、既にその可能性が創造されたということなのだ。

III

この作品は時間の物語であるといえる。しかも焦点は、大部分過去に置かれている。既に述べたようにパラレルに進行してきた fiction と reality が互いの領域を侵し始めて、未来が覗き始めるとき、其処に大きく関わる要素は過去である。Oracle Night 自体、そのタイトルにも拘わらず過去の物語であるのだし、作中作である "Oracle Night" も過去の作家の残した曰くつきの

原稿である。ここで最初に過去が取り上げられるのは、Trause が語る長年没交渉であった義弟のエピソードだ。

ガレージで見つけた三十年前の家族パーティで撮られた3-D 写真のスライド。

… Intense colors, the minutest detail shining in utmost clarity, and illusion of surrounding space, of depth. (38) 鮮明に再現される画像の中で死者たちが皆生きている。彼は映写機が壊れるまで、過去の映像に取り付かれた生活を送る。‘doorknob’ のような鈍感な感受性しか持たない男をこうして ‘philosophical dreamer, anguished soul longing for the unattainable’ に変える過去というものの持つ吸引力を示している。

一方過去そのものを表しているといえるのは fiction 中の Ed Victory である。彼は Bureau of Historical Preservation の創設者であり事務局長であり、たった一人の事務員だ。其処に到着するまでの道が既に過去へと後退している。

… keeping on going for nine or ten blocks, turning left, turning right, slowly wending their way through a network of dilapidated streets until they come to an abandoned stockyard near the river (88) 見捨てられた場所の廃線になって錆付いた線路の廃墟の地下室。鉄の階段、セメントの壁、南京錠で閉じられた窓も無い部屋。ここに閉じ込められた何千冊もの電話帳。第二次戦後の46年から始まった36年間にわたる秘密の収集。この異常なコレクションの背景には、Ed が戦争で見た地獄の光景がある。一度終末を見た者は生きているとしても、常に死んでしまった部分を抱えて生きているのだと彼は言う。記憶の保存はその死んだ部分へのオマージュである。

Nick は執拗に過去の記憶との決別の決意を語る。He has memories, of course, but those memories are no longer relevant, no longer a part of the life that has begun for him and whenever he finds himself drifting into thoughts about his old life in New York-which has been erased,

which is nothing more than illusion now — he does everything in his power to turn his mind from the past and concentrate on the present. That is why he reads the book. That is why he reads the book.

He must lure himself away from the false memories of a life that no longer to him, and because the manuscript demands total surrender in order to be read, an unremitting attentiveness of both body and mind, he can forget who he was when he is lost in the pages of the novel. (65-66)

過去を拭い去ろうとするが皮肉なことに Nick は、その持ち主がすでに死者となっているかもしれない古着を買って着ることになるのだし、最終的に

世界の過去そのものの中に生きたまま埋葬されてしまうことになるのだ。

Nick が膨大な電話帳といういわば客観的な歴史的過去に囲まれたまま、生き埋めの状況になったとき、それに呼応して現実の Orr は痛烈な極めて私的な過去の攻撃を受けることになる。John が打ち明ける息子の Jacob と Grace の過去だ。語られた言葉のみならず、Grace のアルバムに残された視覚的な過去がある。その謎を秘めた過去に彼は囚われてしまう。

…and it contained over a hundred pictures, a visual history of the first twenty-seven years of Grace’s life—Grace before I had met her… experiencing a similar kind of entrapment as the pictures pulled me into the past. (211)

そして Orr は H.G.Wells のタイムマシンの映画脚本の話が来たとき、未来への旅というよりむしろ過去へのそれを考える。

…but the more I thought about it, the more certain I became that most of us would prefer to visit the past. Would anyone turn down that opportunity in exchange for a glimpse of an unknown and incomprehensible future? (121)

死者の力や歴史の謎への興味、失った人々との再会の魅力に比べて、未来を知ることの無意味な残酷さ。結局彼は過去からの旅人と未来からのそれを会わせる話に翻案する。1895年に生きている過去の男と、22世紀半ばの未来世界から来た女の、1963年のケネディ暗殺の時の出会い。悲劇の5日後に到着して、それを知った二人が、タイムマシーンで Oswald の行為を止めようとする話である。しかし、エージェントに無視されるまでも無く、歴史的事実は、誰にもどうすることも出来ない真実である。

Orr がマンハッタンで文房具店 Paper Palace と再会した時、その店頭で人形が小さなタイプライターで小さな紙に次のような文章を綴っている。

It was the best of times, it was the worst of times, it was the age of wisdom, it was the age of foolishness, it was the epoch of belief, it was the epoch of incredulity, it was the season of Light, it was the season of Darkness, it was the spring of hope, it was the winter of despair, we had everything before us, we had nothing before us… (204)

ここには、*Macbeth* の冒頭における魔女たちの邪悪な予言の echo を聞くことができる。きれいと汚いがいつでも逆転する可能性をもって待ちうけている世界、その世界で起きた様々な過去の出来事というものの性質が小さな紙に小さな文字でしかし確かな言葉で刻まれて人々を翻弄しているのである。

IV

これまでに見てきたように、この作品は人間を困惑させる世界の謎、覗く思い掛けない裂け目を取り上げて、其処に関わる最も重要な要素としての言葉の性質を追求している。言葉は事実を語る反面、reality を fictive に、fiction を reality にする要素を持っているものである。どんなに詳細を追求しても、どんなに正確に歴史的事実を記録しても、それは、必ずしも真実を示しているとは限らない。そのような時、人は他の人との間に真に人間的な関係を築くことが可能なのだろうか。愛という観点での人間関係に言葉はどのように関わるのだろうか。

この作品には言葉と対照して沈黙が存在する。Grace とその double である Rosa はともにデザイナーと写真家として、Orr と Nick が言葉を職業にしているとすれば、彼女たちは言葉に対してイメージを職業としている。Grace は過去のそして現在抱えている秘密について Orr に沈黙を守り続ける。また彼女は七歳のときに両親からプレゼントされた人形 Pearl が一言も喋らなかつた、それは話すことはできるのだけれど、喋らないと決心していたからだと思っていたというエピソードは象徴的である。Grace は、'the line she'd drawn between herself and words' (56) を Orr に守らせる。彼が Grace に失踪した理由を追求しても答えは返ってこない。言葉によって真実を探求し、追究し、暴こうとする Orr に対して、沈黙を貫く彼女の主張のキーワードは 'trust' である。二人の対立は結局 Grace の優位に終わる。一瞬にして fictive なものになり得る言葉はどのように連ねても事実を明かすことにならないし、まして必要な真実を告げるという保証は無いのだ。沈黙を無条件で受け入れることで 'trust' することこそ、人間関係の真実に繋がることなのだ。Grace-Orr 関係において秘密が存在するにも関わらず満たされた関係を作り上げた要素として Orr は Intervention of art を指摘するが、これは art に象徴される言葉を越えた信頼を示しているといえる。

Blue Team のことで言い合いになったときの Grace の言葉 : They make mistakes. Good people do bad things, Sid. (54) が示すように、人は必ずしも Blue Team のメンバーであり続ける事が出来ない。Orr 自身、Chang に誘われた店で女性の誘惑に負けてしまったように。思い掛けない過ちを犯すこともあり得る人間社会の中で、沈黙と信頼を無条件に受け入れる心が解決になるのである。Orr は書くことで、つまり言葉によって Grace と John の過去の関係を解き明かしたにもかかわらず、それを破棄することで、彼女の彼への沈黙とそして逆に彼の彼女への沈黙を選択したのである。Trause は彼に、

‘You are lucky you don’t have any children, Sid. They’re nice when they’re small, but after that they break your heart and make you miserable.’ (162) と述懐するのであるが、離婚した妻のもとにいる息子の Jacob の絶望的な悪—学校中退、無職、麻薬中毒、借金、暴力などはアメリカ社会の現実である。この現実の中で、Grace の次の言葉は全てに優先する力を持つものかもしれない。

We trust each other. …The whole idea of marriage is based on trust…People can go through rough time, can they? But that doesn’t mean can’t work out in the end … (154)

想像を超えて変貌する社会とその中で避けられない人間関係の断絶に対して、Auster は‘信頼’という極めて単純で普遍的な価値観を改めて強調しているといってもいい。

最後に、この作品は何故二十年前の物語の設定を取るのでしょうか。時間を扱ったこのドラマにおいて過去、そしてそれを左右するその前の過去、そして予言という形での未来は存在するのだけれど、現在が不在である。Orr は2003年の現在について何も言及しない。唯一、言葉が事実を創作することがあるという理論への信念を語ること以外には、Auster は彼らのその後そして現在について読者に何も知らせようとしない。実は、まさにこの点において、彼が語ってきた時間についての見解が最終的に総括されて示されると言えるのである。物語での Orr は過去の記憶を語り、また書くことでそれを蘇らせながら現在を確認し、未来を無意識のうちに創造していく。“The Book of Memory”の中で Auster は、記憶について ‘Memory, not so much as the past contained within us but as proof of our life in the present’ また、‘…(memory) as a catalyst for remembering his own life and as an artificial structure for ordering the historical past.’ と述べている。⁷⁾

また、次のように言う。

Memory was the only thing keeping him alive and it was as though he wanted to hold off death for as long as possible in order to go on remembering.⁸⁾ これは死の床で話し続ける彼の祖父のことを述べたものであるが、このように記憶とは生きることでもあるのだ。Orr は現在進行する出来事に、長い脚注を用いながら記憶を呼び戻す行為を繰り返して現在を補完し、読み解く手段としている。

こうして完成した記憶の書である Oracle Night の最後を Orr は次のような文章で結ぶ。

…and after a while - in the words of John’s brother-in-law Richard—I had my

face in my hands and was sobbing my guts out. I don't know how long I carried on like that, but even as the tears poured out of me, I was happy, happier to be alive than I had even been before. It was a happiness beyond consolation, beyond misery, beyond all the ugliness and beauty of the world.... (243)

これは実際には二十年前のシーンだけれど、ここに実は Orr の2003年の現在があるのである。彼は、再現された二十年前のシーンを前にして John の義弟 Richard の如くすすり泣きながら美も醜も超えた至福に包まれ、甘美な感傷に耽るのだ。John の死後彼に届いた手紙と小切手についての描写が他と比べて感傷的な印象を与えるのはまさしくその為であり、現在それを書いている Orr 自身の押さえられない感傷を示すものなのだ。Richard の心を二ヶ月間魅了しつづけた過去の映像は3-D viewer の故障で断ち切られる。しかし、Orr の過去のシーンは永遠に失われることがない。何故なら彼は、過去の出来事を回想し、記憶を整理しなおすことつまり過去の re-reading によって再構成したものを記録し、作品として保存するという作業を成し遂げたのであるから。つまり、彼は、無数の過去の電話帳を収集し続ける Ed と同様に Bureau of Historical Preservation の名刺を持ったのだと言ってもいい。Ed のそれが客観的な公的な歴史であるにもかかわらず、極めて私的な視点で保存されたものであるのに対して、Orr のそれは極めて私的な物語でありながら、逆に時間と場所を越えた普遍性を主張するものであるという違いはあるけれども。Ed は膨大な電話帳が並んだ秘密の書庫について次のように説明する。

This room contains the world. ...The Bureau of Historical Preservation is a house of memory, but it's also a shrine to the present. By bringing those two things together in one place, I prove to myself that mankind isn't finished. (91)

この言葉は、やはり一種の‘世界の終末’を経験した一人としての Orr の言葉でもあるのだ。彼は、こうして自分の現在を確認し、世界を確認しようとしているのである。いずれにせよ、Orr の回想記が完結した時、それは実は二十年の歳月を経て‘oracle’が完全に実現した時であったと言える。

以上で見てきたように、Oracle Night において Auster は緻密で巧妙なしかけを散りばめて、記憶という通奏低音を効果的に響かせながら、世界の属性、言葉の魔力と欺瞞、信頼という普遍的な価値観、その中で永遠に seeker であり続けなければならない人間の状況を提示しているのである。

Notes

- 1) Varvogli, Aliko, 2.
- 2) Carsten Springer は Auster の作品に顕著である autobiographical references and literary allusions に注目して、*A Paul Auster Sourcebook* を出版している。
- 3) Auster, Paul, *Oracle Night*, 2. この作品の引用は全てこの版によるものであり、以後引用ページ数は () の中に示す。
- 4) Auster, Paul, *Collected Prose*, 124.
- 5) <http://www.parisreview.com/tpr167/auster.html>
- 6) この本は National Public Radio のプロジェクトとして一般から募集したところ、4000人以上の応募があり、その中から180編を Auster が編集して出版したものである。彼はその序文の中で、このプロジェクトが偶然生まれるに至ったいきさつや出版されるまでの経過を語っている。それぞれ予想を超えた体験談が簡潔な文章で綴られている。たとえば、Auster が最も驚いたと述べている一編 “I Thought My Father Was God” は、家の裏庭に面した意地悪な隣人と言い合いになった父が「死んじまえ！」と怒鳴ったら、その隣人の顔色が急に変わって崩れ落ちて死んだという戦時中の子供のころの思い出を語ったものである。
- 7) Auster, Paul, *Collected Prose*, 116.
- 8) *ibid.* 100.

Works Cited and Consulted

- Auster, Paul, *Collected Prose*, (Faber, 2003).
- Auster, Paul, *Oracle Night* (Henry Holt and Company, 2003).
- Auster, Paul, *True Tales of American Life* (Faber, 200).
- Springer, Carsten, *A Paul Auster Sourcebook* (Peter Lang GmbH, 2001).
- Varvogli, Aliko, *The World That Is The Book* (Liverpool University Press, 2001).

Novels by Paul Auster

- The New York Trilogy* (City of Glass,1985; Ghosts,1986; The Locked Room,1986).
- In the Country of Last Things* (1987).
- Moon Palace* (1989).
- The Music of Chance* (1990).
- Leviathan* (1992).
- Me Vertigo* (1994).
- Timbuktu*, (1999).
- The Book of Illusions* (2002).
- Oracle Night* (2003).